

## 「JENESYS2019」中国高校生訪日団 参加者の感想（抜粋）

### 【第1分団】

○日本の学校では、身体の基本作りがとて重視されている。体育の授業に参加した時、バディが体育はかなりハードだと教えてくれた。各学校に飾られているトロフィーや賞状を見て、その意味が良く分かった。中国の状況をみると、学業の成績にばかり重点が置かれ、机上学習に割かれる時間がとても多く、高校生の身体能力は昔より劣っている。こうした点は日本に学ぶべきだと思った。放課後を学習ばかりに費やすことなく、学業偏重にならない方が良いと思う。

琵琶湖博物館を見学する前までは、たった一つの湖をテーマに博物館を開設する意味が分からなかったが、先生の説明を聞くうちに、その意味を理解した。琵琶湖は日本最大の湖で、巨大な生態系が営まれており、現代生物学における重要な研究対象だったのだ。日本人のこうした方面における知恵にはとても感心した。

また日本人の礼儀正しさ、時間順守の考え方も非常に印象深く、多くを学んだ。

○日本に対する印象を書きたいと思う。日本に到着してすぐ、日本人は規則を守る意識が強く、時間を大切に、礼儀正しいと感じた。各人が自分に任された仕事を責任をもって行い、遅刻など論外だった。その後、日本に対する理解が深まるにつれ、心の中に深く刻まれた感情を文字にすると、「人文關懷（人を思いやる）」に凝縮される。

京都府立北嵯峨高校ではグループ交流を行い、日本の高校生は元気いっぱい、心を込めて、楽しいゲームや美味しいお菓子を用意してくれた。異なる言語や国境という壁は簡単に消え去った。皆思いやりに満ち、他人の気持ちを良く考えてくれた。

ホームステイでは、お爺さんとお婆さんの家にお邪魔したが、家中に私たちの名前が貼られていたので驚いた。二人ともよく笑い、優しく、とても親しみやすかった。一緒に食事の準備をして美味しく頂き、身振りや手振り、また翻訳機を使ったりして、とても楽しく交流できた。他にもいろいろな活動を準備してくれ、私たちの訪問をとて大切にしてくれているのが良く分かった。お別れの時、皆の目には涙があふれた。

埼玉県立越谷南高校では、各授業に参加する時、バディと一緒にいてくれた。彼はとても辛抱強く、優しく、また他の皆もとて友好的だった。実際に体験して初めて分かることが如何に多いのかを知り、また、人を思いやる日本人の気持ちを至るところで感じた。外部から来た私たちだけではなく、日本人の友達同士でも、皆思いやりを持って接していたことが印象深い。こうした温かい思いやりの気持ちが、日本人をとて幸せにし、多くの人がよく笑っていた。そして、お互いを大切に、尊重し合い、理解し合っていた。こうした思いやりの心は物質よりもはるかに価値がある。

○今回の訪問で最も印象深かったのは、日本が先進国になった理由を感じられたことだ。まず、日本の道路、公共の場所は中国に比べて衛生的で、清潔だった。道沿いにはゴミ箱がほとんど見当たらず、これが逆にゴミの量を減らす役割を担っているのが分かった。ゴミ箱のある場所でも、厳格に分別回収が実施されており、ゴミの再利用率が中国より高いのが良く分かった。これも自国の限られた資源を守るため日本政府がとった資源節約、環境保護の方法だと理解した。

次に印象深かったのは、日本人の素養の高さである。常に会釈を忘れず、人々の会話の中に「有難う」「すみません」などの言葉が常に交わされる。店員のお客様へのサービスの質もとて高く、真面目に仕事に取り組み、きめ細やかだった。そして、礼儀正しさを常に忘れず、お客様を第一に考えて

いた。また、公共の場も家庭も非常に清潔に保たれており、こうした点からも日本人の資質の高さが見て取れた。日本人は他者を思いやり、出来る限り他人に迷惑をかけないように配慮しているのにも感動した。

最後に、日本の災害復興作業の迅速さ、質の高さに驚いた。建築物の高さにも一定の制限を設けたり、子供たちへ防災教育を普及させたりして、大規模な自然災害に日ごろから備えていた。急な災害に遭っても、子供たちはきっと慌てふためくことなく、素早く、しっかり危険な場所から逃れ、災害を最小限に抑える努力をすることだろう。こうした点は中国が学ぶべきであると思った。また、日本の高校生は日常生活において独立して、自分を律しており、この点も自分たちが学ぶべきだと思った。

○6月11日、期待に胸を膨らませ、小さい頃からの憧れの国である日本に到着した。まず、虹の下水道館を見学し、一連の技術とプロセスに驚いた。浄水率99%という数字は中国では生半可な努力では達成することが出来ないだろうし、我々がしっかり学ぶべきであると思った。国家や政府のみならず、国民が一丸となって努力してこそ、更なる発展があるだろう。

ボランティア関連のセミナーを通して、国家の一員、社会の一員として、自己の利益のみを求めることなく、他者を助けることで自身を高めるという意義を学んだ。また、日本は地震国で、防災減災に関する教育が必要不可欠であり、それらは子供やお年寄りの防災意識を高めるのに非常に役立っていた。

ホームステイの経験は貴重だった。ありのままの日本、家族、人の温かさに触れることができた。訪問した家庭で、「ここを自分の家だと思って、私たちが本当のお爺さんとお婆さんだと思ってね」と言ってもらい、心が温かくなった。

2カ所の高校を訪問し、やはり同じように温かく迎えてくれた。日本の古典の授業に参加し、日本の漢字は中国の漢字と同じであることが分かった。それならば、日本の高校生も中国の高校生も、そして日本も中国も相通じるはずだと感じた。日本では総合的な素養の教育が重視されており、生徒は放課後のクラブ活動にも積極的に参加していた。皆は団結し、互いに助け合い、先輩や年長者を敬い、人助けの出来る人を称えていた。我々も学ぶべきだと思った。

皆とお別れする時、去りがたい思いが胸にこみ上げた。

中日友好関係は、こうして少しずつ発展していくのだろうと思った。

## 【第2分団】

○今回、初めに訪問した京都府立鴨沂高校は、長い歴史を有する高校だが、校舎を建て替えたばかりで、近代的雰囲気満ちていた。しかしながら、一部の遺構をきちんと保存していた。こうした学校に注ぐ熱意と、先進的な教育理念に深く魅せられた。ここで初めて日本と中国の教育制度の違いを知り、また日本の高校生と初めて近距離で交流した。午後3時半には授業が終わり、放課後は多彩なクラブ活動に参加でき、日本の教育は比較的余裕があると感じた。日本の高校生は私たちを温かく迎え入れてくれ、異国の皆さんの優しさを肌で感じた。

二つ目の学校は東京都立成瀬高校で、京都の高校と大きな差はなかったが、日本の高校生の学習生活を実感でき、自分の今後の学習の助けとなった。日本の高校生の優れた素養や熱心に打ち込む精神を、自分も実践していきたい。

日本には、狭いが清潔な小道、交通量が多くても秩序正しい街並みが至るところで見られた。日本の都市計画には目を見張った。人の多い大都市でゴミが散乱している場面に出くわすことは無かった。我々もしっかり見習わないといけない。日本文化は他者の考えを尊重し、他人に迷惑をかけないように配慮をすることが良く分かった。見知らぬ人からかけられる挨拶、店員さんの「いらっしゃいませ」

の掛け声、日本では毎日が希望に満ちていた。

今回の訪日活動では多くのことを勉強した。そして中日関係のさらなる発展のため、自分ができる努力をしようと思う。

○学校訪問では、担当のバディが案内してくれて交流が進んだ。彼は中国語はできないが、英語やボディランゲージで必死に伝えようとしてくれる態度に、お互いの距離が縮まっていくのが分かり、友情の素晴らしさを肌で感じた。こうした方々のお陰で、中日友好が末永く発展していくのだと確信した。日本の授業では、先生の質問に答えを出す際に、生徒が机を動かして円陣を作り、意見交換をしていた。中国でもこうした方法を取り入れたら良いと思った。こうした意見交流や討論の方法には、学びを促進する効果があると思う。

日中の共通点は、友好的で、おもてなしの心にあふれていることだ。相違点をあげるなら、中国は大きな部分に、日本では細かい部分に焦点が当てられることだ。そして小さい部分が後には大きな効果を上げることもあると思う。今回印象深かったことを二つ書きたい。まず、日本人の時間を守る態度だ。何事も早めに準備し、私たちを長いこと待たせないように配慮してくれた。そして日本の清潔な環境には驚いた。ホームステイでは日野町のお宅にお世話になった。家にはスーという犬がいた。散歩に出た際、犬の排泄物をきちんとビニール袋に入れ、家まで持ち帰っていた。環境に対する意識の高さの現れであり、家の周辺はとても清潔で美しかった。こうした環境を守る意識や考え方はしっかり学び、広く伝えていくべきである。

○1. しながわ防災体験館で、地震や火災が発生した際の救急防災措置を学び、要配慮者の避難誘導やAEDの使い方を教わった。日本は特殊な地理的要因を抱えており、災害発生時における人々のニーズに配慮し、人を中心とした、細やかで効率的な措置が考えられていた。

2. 社会生活において、虹の下水道館では、汚水を全てバイオ処理していると聞き、非常に驚いた。汚染を低濃度にするため、小さなことから努力し、隅々まで環境を維持していた。また、新幹線に乗った時も、その効率の良さや清潔な駅に、近代化による便利さを見た。駅は多くの人で混み合っているのに、そこには秩序が存在していた。中でも印象深いのは日本の清潔さだ。道はそれほど広くないが、とても清潔で、また建物やバスの窓はほとんど汚れが無く、ゴミをポイ捨てする人も見かけなかった。そしてゴミの分別回収が徹底されていた。東京都立成瀬高校では、クラスに四種類のゴミ箱があり、細かさに驚いた。学校で良い習慣を身に付け、身体に覚えさせることで、国民は自発的に行うようになる。社会に流れる心地よい雰囲気から、この国の人々の素養の高さを深く刻んだ。

3. 学校生活について、日本と中国の間には共通点も多いが、学習内容は日本がもっと豊富だと感じた。授業の雰囲気は明るく、先生との間に多くのやり取りがあり、グループワークも多く、これらは日本の授業の特徴だと思った。放課後のクラブ活動の時間は長く、専門性も高く、生徒の専門能力やリーダーシップを伸ばすのにも適していると思った。また、人の話を聞くこと、他者と協力すること、自分を表現することで相互交流のコツも学べる。さらには総合的な素養を高め、良好な習慣を築くことにもなる。

4. ホームステイでは、「他人に迷惑をかけない」ことを常日頃から気をつけねばならないと学んだ。ホームステイのお父さん、お母さんとおしゃべりで、話題が食文化になった。中国では一般に大皿で料理を出し、小皿に分けて食べると説明したら、驚いたことに次の食事の時に大皿で出してくれた。ホームステイを少しでも楽しんでもらいたいからだと言う。こうした細やかな心配りには感動した。ほかに、運転手さんとの毎日の挨拶、友人たちが別れを惜しみ振り続けてくれる手、本物で温かい笑顔、そのいずれもが日本の友好と魅力を見せてくれた。

○訪日期间中、優しさと友情に包まれていた。日本社会や礼節も知った。日本は礼儀を非常に重んじる国であり、細かい部分もとても重要視していることは、大変印象深く、手本として学ぶべきであると思った。また、毎日、日本式のリズムの中で生活し、皆が時間をしっかり守り、時を大事にしていた。今後の生活に是非取り入れようと思う。

多くのことが印象深いですが、その中でもホームステイと東京都立成瀬高校での体験が忘れられない。この感覚は一生忘れない。ホームステイ先のお父さんとお母さんはとても優しく友好的で、お二人の愛情と家庭の温かさを肌身で感じた。この愛は飾りや作り物ではない、心から湧き出る自然の愛で、自分の本当のお父さんやお母さんの愛情と変わりがない。国も違えば、言葉も異なるが、愛には垣根が無いことが分かった。東京都立成瀬高校で授業に参加したが、先生はとても分かり易く、優しくかった。また、机を動かしグループ討論も行ってた。中国の授業では見られない方法だが、中国でも広めて行ったら良いと思う。この手法は他のクラスメートの考えや意見をよく理解でき、さまざまな考えから正解を導き出すことができる。訪問した学校では、3人のお姉さんがとても親切に案内し面倒を見てくれた。授業中、文字が異なり私が理解できない場面では、一生懸命に説明してくれた。人に対する優しさ以外に、学習方法についても学んだ。学校交流でも、視察でも、本当に学ぶところの多い訪日活動だった。

### 【第3分団】

○今回の訪日活動に参加できたことを非常に光栄に思う。北海道札幌丘珠高校の訪問では、先生や生徒の礼儀正しさ、傲慢でもなく卑屈にもならない態度、他人に優しく、自分を大事にする気持ちの在り方に心が揺さぶられた。特に、茶道体験が印象深い。茶道を教科というより、芸術やたしなみとして習い、お茶を点てる動作は本当に優雅だった。

また本州では大阪府立門真なみはや高校を訪問した。不便な場所にある学校だったが、皆とても温かく迎えてくれ、多くの中国籍の生徒が学んでいて、より深く交流でき、身近に感じた。クラブ活動の中でも軽音楽部に感動した。専門の指導を受けている訳ではないというが、その演奏や歌唱力は心に響いた。高校生であれだけ素晴らしい演奏ができるなんて、努力と情熱をどれだけ注いだのだろうかと感動した。

学校訪問はいずれも半日と短い時間ではあったが、短い交流から多くを学んだ。両国の先生と生徒、そして両国や文化が、双方で更に発展し合い、交流が広がることを願っている。

○訪日活動で最も印象深かったのは、日本の高校生の友情と優しさだ。正直に言うと、最初は交流が少し怖かった。なぜかと言うと、言葉が通じなくて、沈黙してしまったらどうしようと思ったからだ。しかし、実際に会ってみたら、そんな心配は消え去った。皆の顔には微笑みがあふれ、言葉が通じなくても、心で繋がれることが感じ取れた。交流を通して多くの日本の高校生と知り合いになった。この友情を今後も末永く継続させていきたい。

日中のボランティア活動における違いは、特にボランティアを提供する対象、活動に参加する年齢層、活動を実施する体制の三つに顕著だった。例えば、日本では個人のお宅に赴き提供するボランティアもあるが、中国では大衆に対するボランティアが一般的だ。私たちは学校の休暇を利用して、博物館や科学技術館などで解説員のボランティアをする。セミナーの先生の話によると、日本ではボランティアの年齢層は大学生以上の成人が多いようだが、中国では小学生の「チビっ子ボランティア」を募集している場所もあり、また「毎月、お小遣いから一元を寄付しよう」といった活動もあり、ボランティアを成長の過程で身近なものに位置付けている。体制においては、中日ともに作業内容のレ

ベル分けがされていた。ボランティア活動においては、双方で学び合い、手本とする部分が多くあると感じた。

中国が日本から学ぶべき点と感じる点として、次の二つを挙げたい。

まず、伝統文化の継承である。日本では至るところに高層ビルが立ち並んでいたが、その中に伝統建築をしっかりと残していた。中には近代建築なのに古風に作られている物もあった。日本人は日常生活にも伝統的な食習慣などを残しており、文化の継承に役立つと思った。

二つ目に、細やかさである。ホテルの浴室の鏡に、一部に曇り止め処理がされていた。こんなちょっとした心配りで、利用者は気持ちよく使えるものだと感じた。

○この訪日活動で多くの場所を訪問した。横浜市民防災センター、北海道キッコーマン（株）、札幌オリンピックミュージアム、北海道開拓の村、北海道庁旧本庁舎、むらかみ牧場、ATC エイジレスセンターなどさまざまな分野に及んだ。

キッコーマンでは、日本独特の生産を学んだ。原料は小麦、大豆、水と塩だけ、もっと驚いたのは、全生産ラインに人間はたった二人で、他は全てオートメーション化されていたことだ。これで一日に多い日は三万本もの醤油を生産していると言う。オートメーション化によりマンパワーを削減し、更に多くの価値を創出する考え方を身に付けた。科学技術のたゆみない発展により、更に高品質な製品を生産できるだろう。

ATC エイジレスセンターでは、さまざまな車椅子など介護補助機器を見学・体験した。高齢のため生活が制限され、不便を強いられている老人が、非常に良く設計されたトイレ、風呂、車椅子などを使って少しでも便利に過ごすための工夫が凝らされていた。これには非常に感心した。自分たちもいつかは老いる日が来るのだから、若い内に自分たちの将来に貢献をしていきたいと思った。

日中の共通点は、書画、経書、文化や習慣などを伝承しているところ。逆に相違点は、日本食は海鮮が多く、寿司に代表されるように、風味が良く特色ある食材が多いように思った。

○1. 細かい点を厳格に、習慣化していた。全てのプロセスが分刻み、秒刻みでスケジュールリングされ、休憩時間なども周到に予定が組まれており、どれだけ細かく準備してくれていたのかが良く分かった。食事の量も適量で、配布資料も人数分、だからと言って足りない人は一人もいない。こうした背景には、厳格に時間や規則を守る態度がある。ATC エイジレスセンターでは、車椅子のブレーキかけ忘れ防止機能、上り坂や下り坂のアシスト機能、ベッドを下げる時に下方にいるペットを挟み込まないような二段階降下設計が成された介護用ベッドなど、こんなに細かい点にまで配慮をするなんて、これこそが人に優しいデザインであると感じた。

2. 真心をもって、誠心誠意で他人に接する。通訳の方、運転手さん、ホテルのスタッフ、学校の先生や生徒。皆と触れ合うと、心からの真心を感じた。早朝に投げかけてくれる微笑み、夕方になると私たちが疲れていないか気遣ってくれる優しさ、そうしたやり取りの中から愛情が伝わって来た。北海道札幌丘珠高校では、暑い太陽の光を遮り私たちを守るように、皆がアーチを作って送り出してくれた。大阪府立門真なみはや高校でも、大きな太陽が照らす中、いつまでも手を振り送ってくれた。準備されていたどの授業も優しさにあふれ、私たちと交流したいとの気持ちがとてもよく現れ、常に善意の中に身を置くことができた。

3. 社会や集団を思いやる心を持ち、優秀な社会の一員になりたい。日本では、他人に迷惑をかけるようにと言われる。小さなゴミを残さない、自分が座った椅子を戻す、各種ボランティア活動に参加する。自分を一番低い位置に置いてこうした事に当たるようにすれば、社会に対する責任感の強い人間になれると思う。小さな児童の面倒を見る、災害復興作業に関わるなど、中国と異なる定義の

ボランティア活動も多いが、我々の初心は同じである。自分の命とつながっている人の為に自分ができることをする。これは神様が命に与えた根本的な意義であると思う。